

シンポジウム

「日中研究者による東亜同文書院研究」

東亜同文書院大学記念センター長 藤田佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センター、オープン・リサーチ・センター主催の日中研究者による国際シンポジウムが、2007年7月28日（土）の午前10時から17時まで、愛知大学豊橋校舎記念会館3階小講堂で開催された。

この国際シンポジウムは、昨年2006年12月に上海交通大学（中国）で開催された同タイトルのシンポジウムを愛知大学を会場に再現したものである。それは日本の霞山会が支援し、愛知大学（代表 藤田佳久教授）と上海交通大学（代表 葉敦平教授）との東亜同文書院をめぐる史実をベースとした共同的研究の成果を発表しあったもので、愛知大学3名と上海交通大学（同大学を中心に8名）の計11人の発表があった。

愛知大学と上海交通大学の間で行うことになったこのシンポジウムは、かつて隣同士に立地し、両大学に交流関係を育てながら、第2次上海事変で書院の校舎が中国兵によって焼失し、戦火を避けて奥地やフランス租界へ疎開し、避難民の場所になっていた上海交通大学の校舎を借用したことで、新たな緊張関係が生じ、相互に意識した。とりわけ交通大学側は校舎を奪われることになった。そのような経緯をふまえ、あらためて書院の存在を日中間で客観的に認識しあう契機が生じ、かつて書院を経営した東亜同文書院を継承した霞山会が、この共同研究を支援した経緯があった。

史実を共通にしようとした研究は中国側研究者にとっては画期的であり、中国側から新しい事実や視点も出されたため、ぜひ日本でも同様なシンポジウムを開催したいと願い、中国側もこの企画に快く対応してくれた。

ただし、中国側は2名が体調不良で来日できず、その発表をふくめ葉先生にあわせて発表していただいた。一方、日本側では、愛知大学でこのシンポジウムを開催する機会に、『中日大辞典』の編纂を行ってきた今泉潤太郎先生と、当研究センターでポスト・ドクターの若手研究者である武井義和氏を新たに加え、発表陣を整えた。また新たにコメンテーターとして、東亜同文書院を再評価してきた栗田尚弥先生をお願いした。

当日の出席者は200名を越え、地元はもちろん、東京、大阪など全国各地から参加され、近年高まりつつある東亜同文書院に対する関心の高まりを示した。終了後、「ルミエール」で行った懇親会にも多くの出席者が参加し、津軽三味線の演奏もあり、賑やかで和気あいあいのふんいきですすめられた。

なお、翌7月29日は豊橋周辺のバスツアーを行い、夕食をとった豊川稲荷門前町での和食食堂では、今後の研究協力をめざすことを含め懇親を深めた。さらに7月30日は名古屋と明治村のツアーを楽しんでもらった。